



『ユダヤ人問題によせて

；ヘーゲル法哲学批判序説』

カール・マルクス著；城塚登訳 岩波書店／岩波文庫

本館	請求記号：K/316/Ma59 X/080/I95W/Mar	資料ID：108107145 700103211
神田分館	請求記号：X/080/I95W/Mar	資料ID：700124621

人間科学部教授 広瀬 裕子

岩波文庫版だと60ページ足らずの短いもので「ヘーゲル法哲学批判序説」と2本立てで1冊になっています。私はこれを初めて読んだ時、タイトルから想像していたものと中身が違っていてガツンとやられました。大学2年生の頃だったと思います。ユダヤ人が差別されている話だろうとたかをくくっていたのですが、描かれているのは、近代社会の枠組みがどのようなもので、そこにおける人間像がどのようなものか、です。

確かにユダヤ人の差別問題は出てきます。けれども、その「ユダヤ人問題」を使って、近代社会では人間は生身の人間と抽象的な存在の二重の側面を持って存在していること、市民であると同時に公民(国民)として存在していることを導き出すその手法に唸ってしまいました。

短いと言っても読みやすいというわけではありません。慣れないととっつきにくいですが、噛み締めながらまずは1回読んでみてください。そして2回、できれば3回。だんだん目の前がひらけて、おお、そういうことだったのか、と、なるはずです。

著者のマルクスは言うまでもなく『資本論』で有名な人です。この「ユダヤ人問題によせて」はマルクスの初期の作品です。若きマルクスが、新しく形成されてくる社会がどのような社会かを明らかにしようと格闘していた頃の作品で、『資本論』から離れて読める内容です。